



TITLE:

<學界展望>中國東北地域史研究と
檔案資料：地方政治と土地問題との
関わりを中心に

AUTHOR(S):

江夏, 由樹

CITATION:

江夏, 由樹. <學界展望>中國東北地域史研究と檔案資料：地方政治と土地問題との関わりを中心に. 東洋史研究 1999, 58(3): 591-611

ISSUE DATE:

1999-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155262>

RIGHT:

中國東北地域史研究と檔案史料

— 地方政治と土地問題との關わりを中心に —

江 夏 由 樹

はじめに

一 遼寧省檔案館とその所藏史料

二 張家の土地支配に關する檔案史料

1、張家の人々とその歴史

2、檔案史料への接近のための二次史料利用

3、土地關係檔案史料の考察

三 奉天における辛亥革命と檔案史料

1、奉天における辛亥革命

2、檔案史料集の刊行

3、張裕に關する檔案史料

結びに代えて

はじめに

筆者はこれまで中國東北地域、とくにかつての奉天省（現在のほぼ遼寧省にあたる）における在地勢力の擡頭とその土地問題との關わりについていくつかの論文をまとめてきた。日清戰爭、義和團事件、日露戰爭と續く戰亂、地域秩序の混亂のなかで、清朝中央が派

遣した地方官に代わって、奉天の在地勢力の一部は民間武裝組織（鄉團）の指導者、あるいは、清末期に開設された諮議局などの地方議會の議員として、この地域の政治の主導權を次第に掌握していった。辛亥革命期を経て、かれら在地勢力は次第に奉天行政機構の内側に參入し、さらに、張作霖・張學良政權、「滿洲國」の時期にいたると、この地域の地方官僚集團の重要な一角を形成していった。そうした在地有力者の代表的な事例として、筆者は清末の鄉團指導者から奉天諮議局副議長、さらに、張作霖・張學良政權、滿洲國の高官となった袁金鎧、また、辛亥革命期にこの地域の同盟會の指導者であつた張裕（本名は張煥裕）らの辿つた歴史を取り上げたことがある。⁽¹⁾

こうした在地勢力の有力者の多くは、辛亥革命後、廣い面積の土地を有する地主であつた。しかし、清朝の時代、この地域には各種官莊、王公莊園、旗地などが廣く設けられ、州縣の管轄する一般の民有地の面積は極めて限られていた。つまり、清朝皇室や王公などがこの地域の多くの土地の權利を有していた。清末以降、これら官莊・莊園などは官地と總稱され、民間への拂い下げなどを通じて解體・整理されていった。⁽²⁾ こうした官地の民有地化が進むなかで、後に大地主と言われた人々の多くはかつての官莊・莊園などの土地の權利を自らの掌中に収めていったと思われる。では、後に大地主と言われた人々は、清朝の時代、こうした官莊・莊園などの土地とどのような關係にあつたのであろうか。また、どのようにして、こうした官地を自らの土地とすることに成功したのであろうか。

ここで注目したい點は、これら在地有力者の多くが清朝の八旗制度のもとでは漢軍旗人という身分を有していたことである。上述の

袁金鎧、張裕、また、辛亥革命期の東三省總督であった趙爾巽、奉天諮議局議長であった吳景濂、奉天選出の資政院議員であった王玉泉などをはじめ、この地域の多くの有力者は漢族でありながら、旗籍を有する漢軍旗人であった。筆者は、そうした漢軍旗人の一部が清朝の時代には官莊・莊園などの土地を管理・占有していたこと、そして、清末以降、官地の民有地化が進むなかで、かれらがそうした土地の權利を獲得し、地主として擡頭していった動きを考察してきた。清朝の時代の土地制度と清末以降の在地勢力の擡頭という問題との關係を採るなかで、つまり、清朝史との有機的な連關のなかで、中國東北地域の近代史を考察しようとしたのである。

上記のような問題を考察するなかで、筆者が利用した基本的な史料の一つが遼寧省檔案館などに所藏された檔案史料であった。本稿では、こうした問題をめぐって、筆者が史料を求めて辿ってきた道を、特に、檔案史料利用の可能性、あるいは、その難しさといった點からとらえなおしてみたい。個別研究課題からの接近ではあるが、それだけに、論點を具體的に明らかにできると考える。

一 遼寧省檔案館とその所藏史料

中國東北地域史の研究を進めていくうえでの貴重な史料の寶庫として、第一に、中國遼寧省檔案館を挙げることができる。本稿が利用する檔案史料の多くも、この遼寧省檔案館に所藏されているものであった。本號が檔案史料、檔案館についての特集號であることから、あらかじめ、この遼寧省檔案館の所藏史料について簡単な紹介をしておきたい。

遼寧省檔案館は瀋陽市にある遼寧省人民政府の敷地内にあり、閱

覽室などが置かれている檔案館の舊館建物はかつての東北大學圖書館である。『中國檔案館指南叢書 遼寧省檔案館指南』によれば、遼寧省檔案館の所藏史料は六五七種類の全宗、二三一萬六千卷(冊)の檔案、資料であり、それらは大きく「唐代檔案」、「明代檔案」、「清代檔案」、「民國檔案」、「日偽檔案」、「國民黨檔案」、「東北大區檔案」、「建國前後省級黨政・群機關檔案」と分類されている。表1は一萬卷以上の數量の史料からなる全宗の名稱を記している。そこにあるように、所藏史料は壓倒的に清代以降のものが多い。各檔案史料はそれらがかつて所藏されていた官衙ごとにとまとめられている。したがって、民國期に設けられていた官衙の檔案、つまり、ある全宗が「民國檔案」として分類されていたとしても、そのなかに清代の檔案が數多く殘されている場合も少なくない。現在、所藏されている檔案史料の整理が進んでおり、その成果は各種の史料集・研究書として相次いで刊行されている。自己の研究テーマと関連する史料集・研究書が刊行されていけば、實際に檔案館を訪問する前に、それらに目を通しておくことが必要である。それにより、現地での史料調査の効率はかなり高まるはずである。

さて、奉天における土地問題と地方政治との關わりという筆者の研究關心から、遼寧省檔案館所藏史料について概観してみたい。まず、土地問題については、「奉天官地清丈局」、「盛京內務府」、「奉天省財政廳」、「奉天省長公署」などの全宗に關係する史料が數多く殘されている。このうち、清末以降の土地問題を考察していく際、基本的な史料として、「奉天官地清丈局全宗」を挙げることができる。官地清丈局は辛亥革命後の一九一四年に設立され、一九三〇年代まで上に記したような官地の整理、その拂い下げを實際に行

表1 一萬巻以上の檔案より構成される遼寧省檔案館所藏の全宗

全 宗 名 稱	年 代	案巻數量
盛 京 內 務 府	乾隆7—民國14	48452
東三省鹽運使署	光緒30—民國20	20801
奉 天 省 長 公 署	光緒32—民國20	33539
奉 天 省 財 政 廳	光緒26—民國20	171388
奉 天 總 商 會	光緒32—民國20	10843
熱 河 省 長 公 署	民國3—民國21	33838
熱 河 省 財 政 廳	光緒32—民國21	17678
熱河省高等檢察廳	宣統3—民國21	15996
新 民 縣 公 署	光緒32—民國20	13467
興 京 縣 公 署	道光9—民國20	48221
本 溪 縣 公 署	光緒34—民國20	18950
安東地方檢察廳	宣統元—民國20	19791
鳳 城 縣 公 署	光緒32—民國20	27989
寬 甸 縣 公 署	光緒28—民國20	16586
岫 巖 區 法 院	光緒22—民國20	12363
海 城 縣 公 署	光緒32—民國20	32458
海 城 區 法 院	光緒27—民國20	10503
蓋 平 縣 公 署	光緒22—民國20	126871
復 縣 公 署	光緒20—民國20	44088
黑 山 縣 公 署	光緒34—民國20	17655
錦 縣 公 署	咸豐7—民國20	33235
綏 中 縣 公 署	宣統元—民國20	14344
彰 武 縣 公 署	光緒34—民國20	12639
鐵 嶺 縣 公 署	光緒32—民國20	18177
開 原 縣 公 署	光緒32—民國20	11295
西 豐 區 法 院	光緒34—民國20	11135
昌 圖 縣 公 署	光緒17—民國21	13175
南滿洲鐵道株式會社	1907—1944	13815

遼寧省檔案館編『遼寧省檔案館指南』（中國檔案出版社，1994年）484—517頁，「館藏檔案全宗名冊」より作成。

った機關である。⁽⁵⁾この官地清丈局關係の檔案史料を分析することにより、二〇世紀初頭以降、奉天の地で進められた官地の民有地化の實際の過程が如何なるものであり、そこにどのような問題が存在したのかを具體的に明らかにすることが期待できよう。こうした理由から、筆者が最初に閲覽を試みた史料はこの「奉天官地清丈局全宗」であった。

官地清丈局關係の檔案史料は滿洲國時代の舊記整理處によって蒐集・整理され、その後、遼寧省檔案館に所藏され、現在に至っている。かつて、滿洲國政府は中央、地方の各官衙、地方自治團體が所藏していた大量の舊政權時代の文書類を奉天に設けた舊記整理處に

送らせ、その整理を進めていた。滿洲國政府はこの地域の支配を確立していくために、これら舊政權時代の檔案史料から貴重な情報を得られると期待したのである。官地清丈局の檔案もそうした経緯により蒐集された文書類であった。⁽⁶⁾

「奉天官地清丈局全宗」は九四〇一巻の史料からなる。筆者は、このうち、約三十數巻程の史料に目を通した。史料は一巻ごとに大型の封筒の中に納められており、程度の差はあるものの、その一巻、一巻が相當の分量からなっている。したがって、官地清丈局の檔案史料を読み進め、その全體像を捉えていくためには相當な時間と努力を費すことが必要であろう。ただし、この「奉天官地清丈局

全宗」には舊記整理處の時代に作成された目録がある。この『官地清丈局檔案目錄』（二冊からなる）は各史料に一から九四〇一までの登録番號を付し、その内容を示す標題を「件名」の欄に記している。また、「原存機關」という欄が設けられ、ここにはそれら史料を元々所藏していた機關、例えば、「奉天官地清丈局」、あるいは、その一部門、下部機關であつた「奉天屯墾事務局」「西路丈放事務局」といった名稱が記されている。さらに、「年代」という欄が設けられ、ここには各史料の作成時期が書かれている。各檔案が作成された年代は民國二（一九一三）年から同一九（一九三〇）年までのものが多いが、隨缺地、伍田といった八旗官兵の職田を拂い下げた奉天屯墾總局の檔案については宣統三（一九一）年のものが多い。

清末、さらに、辛亥革命以降、奉天の地で進められた官地の拂い下げ事業は非常に大規模なものであり、『目錄』の「件名」に記されている内容も盛京内務府、同戸部等の各種官莊、各王公府の莊園、三陵所屬地、荒地の拂い下げについての個々の事例の報告、各地域・地目ごとの官地の拂い下げの進行状況やその結果、丈放事務の人事、組織、豫算などと實に多岐に渡っている。したがって、こうした史料を一卷ずつ丹念に讀み込むことにより、確かに、當時の官地の民有地化の實態がかなりの程度具體的に明らかになることが期待できる。しかし、この目録を讀むなかで、筆者は次の點が氣になつてきた。

まず、當然のことではあるが、檔案史料はそれを所藏した官衙ごとにとまとめられているということである。このことは、官地清丈局關係の檔案全てが必ずしも官地清丈局檔案としてまとめられてい

いることを意味している。例えば、官地清丈局の全宗目録を閲覧するなかで、後述の三陵所屬地、盛京戸部官莊關係の史料が比較的少ないことに氣づいた。民國初期、これらの土地については様々な係争が存在していただけに、この事は意外であつた。そこで分かったことは、かなりの量の官地清丈局關係の檔案が「奉天省長公署全宗」として保存されていることであつた。つまり、當時、官地清丈局では處理しきれない問題、特に、政治的判斷を必要とするような案件は官地清丈局から、上級機關である奉天省公署の方に送られ、奉天省長公署の檔案として處理、保存されていたのである。したがって、土地問題を考察する場合には、「奉天官地清丈局全宗」のみならず、「奉天省長公署全宗」なども同時に調査する必要がある。むしろ、當時の政治と直接に関わる土地問題などについては、奉天省長公署の全宗を優先的に閲覧する方が效率的かもしれない。こうしたことは、土地に關する場合だけでなく、他の問題についても言えようである。

「奉天省長公署全宗」は三三五九卷からなる膨大な全宗である。その檔案の多くは光緒三二年から民國二〇年（一九一〇—一九三一）にかけて作成されたものであつた。「光緒新政」の進むなかで、光緒三二年、それまでの軍政を中心とする東三省の支配機構は他の中國各省と同様な民政に改められ、盛京將軍に代わつて東三省總督がこの地に配置された。『遼寧省檔案館指南』によれば、「奉天省長公署檔案」はこの清末期から九・一八事件までの時期の、例えば、この地域の人民の反封建・反帝國主義鬭争、日本を中心とする帝國主義の侵略と當時の國際關係、奉系軍閥、嶺山資源、工業、土地制度、自然災害などに關する重要な檔案史料から構成さ

れている。⁽⁸⁾ 恐らく、この全宗も滿洲國の舊記整理處によって蒐集・整理されたものと考えられる。

「奉天省長公署全宗」の閲覧についても目録が重要になる。この全宗に關しては、筆者は二種類の目録に接した。一つは、遼寧省檔案館の設立後、比較的早い時期に作成されたものと思われる。この目録では、各巻が「巻號一」から「巻號三三五九」まで數字の順に並べられ、その内容を記した「案卷標題」、その作成時期を示す「案卷起止日期（清朝・民國の曆）」、その檔案を起案した「立檔單位」などの欄からなる。「立檔單位」には、奉天將軍衙門、軍督部堂、奉天行省長署、奉天巡按使公署、奉天省長公署などの記載がある。この目録は分類目録であり、例えば、「巻號四〇二四」から「巻號四七一九」までが「農業類」、「巻號四七二〇」から「巻號五七七三」までが「財經類」といった具合である。もう一つの目録は近年に作成されたものようである。これも分類目録であり、ここでは各分類項目ごとに、様々な「巻號」を持った檔案の「番號」「案卷標題」「案卷起止日期（西曆）」が記されている。この目録の場合、「立檔單位」の記載はない。

ここで問題となるのは、分類目録の場合、目指す檔案がどの項目に分類されているのか必ずしも明らかでないことである。例えば、土地問題などの場合、農業類、財經類、總合類などに分類されていることが多いが、これは、あくまでも筆者がある程度の分量の案卷を閲覧した後に得た知識であった。また、目録の「案卷標題」にある簡単な記述から、その檔案に記された詳細な内容を的確に豫想することは難しい。特に「奉天省長公署全宗」などの場合、目録の分量そのものが膨大であり、限られた時間のなかで、自己の研究

課題と直結する檔案史料を見いだすことは必ずしも容易でない。

上述のように、「分類目録」から關係する檔案を探しだすという、時間のかかる作業を續けるなかで、筆者が利用した檔案史料の多くは、結局、この「奉天省長公署全宗」のなかに見いだすことができた。なぜならば、「奉天官地清丈局全宗」が主に、官地の拂い下げに關する一般的な業務記録から構成されていたのに對し、「奉天省長公署全宗」には拂い下げをめぐる様々な係争の記録が含まれていたからである。こうした係争の記録のなかにこそ、當時の土地問題の本質を探る手掛かりが存在していた。筆者が着目する奉天の大地主と言われた張家の土地支配の一端を示す史料も、こうした係争の記録として残されていた。

二 張家の土地支配に關する檔案史料

1、張家の人々とその歴史

檔案史料について論じる前に、まず、筆者がなぜ張家の歴史に着目したかについて説明したい。張家はかつて奉天における最大の地主の一人と言われ、清末以降、この地域の革命派の指導者であった張榕（張煥榕）、また、日本の陸軍士官學校を卒業し、張作霖・張學良政權、滿洲國の高官であった張煥相（張榕の従弟）といった人物を輩出したことで知られている。この張家は、元々、後述する三陵衙門に所屬した漢軍旗人の家であった。そこで、筆者はこの張家の歴史を探ることで、奉天における官地の民有地化、そのなかでの地主層の擡頭という問題に接近できると考えたのである。

上記のような研究關心を持ち、遼寧省檔案館を訪問したとして

も、張家に關係する檔案史料の考察が直ちに可能となるわけではない。前述のように、檔案館に所蔵されている各全宗の目録を検索したとしても、その件名欄にある簡単な内容の記述から、ある特定の家の土地支配に關わる史料を見つけ出すことは決して容易でない。筆者の場合も、まず、文史資料、あるいは關連する二次史料を読むなかで、關係する檔案史料を探し出す手掛かりとなるような語彙を抽出していった。そこで、ここでは、筆者が張家の土地支配について、まず、どのような作業假説をたてたのか、そして、どのような方法で檔案史料に迫っていったのかという點に問題を絞って説明をしたい。

張家の歴史を考察する際、秦誠至「辛亥革命與張榕」という文章が貴重な情報を与えてくれる。いわゆる「文史資料」である『辛亥革命回憶錄』のなかに收められたこの文章には、革命家としての張榕の足跡だけでなく、かれの生家についてもかなり詳しい記述がある。それによれば、二〇世紀初頭、中國では立憲政治の確立を求める運動が高揚し、清朝は五人の憲政考察出洋大臣を歐米に派遣し、各國の立憲政治の内容を調査させようとした。一九〇五年九月、この憲政考察出洋大臣が北京驛を出發しようとした時、吳樾という人物がこの使節の爆殺を圖った。この暗殺計畫は失敗し、吳樾は爆死する。この吳樾の行爲は、當時、同盟會などを中心とする革命派により大きく稱賛された。この吳樾の共犯こそ、奉天屈指の名家と言われた張家の息子、張榕であった。當時、張榕は勉學のために北京に出ていたという。張榕は清朝官僚により捕らえられたものの處刑を免れ、天津刑務所に收監された。不思議なことに、その後、かれは脱獄に成功し、日本に逃亡した。こうした事情の背景には、張家

が多額の賄賂を當時の實力者であった宦官の李蓮英に贈り、この李蓮英の口添えにより、西太后が張榕の助命を指示したことがあったという。東京で同盟會との關係を深めた張榕は、辛亥革命直前、奉天に戻った。反清運動の「英雄」として故郷に迎えられた張榕はこの地の同盟會幹部として革命を指導した。しかし、一九一二年一月、奉天における革命運動が高揚するなかで、張榕は張作霖の配下により暗殺された。

秦誠至の文章のなかで特に注目したい點の一つは、張家が、代々、清朝の三陵に所屬する官員の家であったことである。三陵とはヌルハチ（太祖）の祖先、ヌルハチ自身、ホンタイジ（太宗）を祀る永陵、福陵、昭陵を指す。永陵は現在の撫順市東方の新賓縣、福陵、昭陵は瀋陽市近郊に位置している。つまり、張家はこれら清朝の陵墓を管理する家であったと言えよう。清朝の時代、その皇室祖先が生まれたとされる長白山（現在の吉林省と朝鮮との間に位置する）から吉林省東南部を通り、奉天近郊の昭陵にいたるまで、巨大な「エネルギー」である「龍氣」の通り道筋が走っていると考えられていた。この龍氣は清朝を支えるエネルギーであり、この龍氣の道筋が「龍脈」と呼ばれていた。この龍脈は廣大な面積からなる帶狀の地域であり、清朝により手厚く保護されていた。そこには各種の三陵所屬地、封禁地が設けられ、一般人民がそこに立ち入り、狩獵、耕作などを行うことは固く禁じられていた。三陵衙門は上記の三陵そのものだけでなく、こうした龍脈、各種封禁地の管理をその任務としていた。この三陵衙門のなかで、張家はかなりの地位にあったらしい。張榕の姉である張桂（本名は張煥桂）が三陵四品官を代々務めていた王家の息子、王世祺と結婚していたことも、この張

家が三陵衙門のなかで相當高い地位にあったことを示している。この四品官は三陵に所屬する膨大な土地・財産を管理する大官であった。筆者も「奉天省長公署全宗」に収められている「旗務處造送旗職人員應行編列繕紳名單 宣統元年」（案卷番號二〇五三）という檔案のなかに、「福陵世襲四品官世祺」という記述を確認した。⁽¹¹⁾三陵の財産を管理した官職が世襲であったということの持つ意味は重要である。張榕の父である張欽善も廣寧府で三陵倉官の職にあり、その傍ら、通化、新嶺、撫順などの地で燒鍋（釀造業）、糧棧（穀物問屋）などを經營していたという。

秦誠至の説明によれば、張家は西豊縣に約一萬九千二百畝、奉天城の近郊にも約一萬畝という廣大な土地を有していた。また、一九二八年に行われた天野元之助の調査によれば、當時、東省特別區長官であった張煥相は撫順に約一萬二千畝、吉林省樺甸縣に約二千畝の土地を有していた⁽¹²⁾。張作霖政權時代の奉天政治に詳しくかつた園田一龜は、張家を奉天屈指の「富豪」「素封家」と呼んでいた⁽¹³⁾。ここで注目したい點は、こうした張家の所有地が展開していた奉天、撫順、西豊、興京、樺甸などの地域は、上述の龍脈の上にあったことである。ここで、一つの假説、あるいは、見通しのようなものが成立する。つまり、張家はかつて三陵の官員として、自らが管理していた三陵の所屬地、各種封禁地などの一部を、その拂い下げの機會に乗じて、自らのものとしてしまったのではないかということである。清末以降、奉天屈指の大地主として成長した張家の所有した土地は、元々、清朝の家産であった可能性がある。清朝皇室が政治權力を失うなかで、辛亥革命後、かつてその家産を管理していた官員たちは清朝の土地財産を解體し、その一部を自らの經濟基

盤としながら、政治的な擡頭を遂げていったことが考えられる。

2、檔案史料への接近のための二次史料利用

以上のような假説をたてたことにより、筆者は遼寧省檔案館の所藏史料から張家の土地支配の歴史を示す文書を捜し出すことを目指した。しかし、そこには次のような問題が存在した。まず、「奉天官地清丈局全宗」「奉天省長公署全宗」「八旗地畝冊」などの目録にある「件名」「案卷標題」の欄にある記述は極めて簡潔であり、そこには、官地の拂い下げを受けた個々の人物の名前などは記されていない。つまり、關係する全宗の「目録」から直接に張家に関わる檔案を見つけることは困難である。そこで、筆者は「件名」「案卷標題」のなかに示されている、各官地の拂い下げが行われた地域名に着目し、張家の經濟基盤があったと言われる撫順、西豊、樺甸などの土地の拂い下げに關係する檔案の閲覧を試みた。それでも、次のような問題に直面した。まず、當然ながら、閲覧するべき檔案の数があまりにも多くなるということである。そもそも、限られた時間のなかでは、閲覧できる檔案の数にも限りがある。さらに、張という姓はあまりに一般的であり、張という姓を持つ者が官地の拂い下げを受けた記録も存在したが、それらの人物と本稿が論じる張家との關わりを確認することは出来なかった。また、筆者が早い時期に閲覧していた「奉天官地清丈局全宗」「八旗地畝冊」などのなかにまとめられている、官地の拂い下げに關する一般的な記録には、細かな地片の拂い下げについてのものが多く、そこに、官地の解體から大地主が生まれてくる經緯を直接示すような史料を見いだすことは難しかった。たまたま、廣い面積の土地の拂い下げ記録があっ

た場合にも、その拂下げを受けた者の名前は個人名でなく、例えば、「想龍山公會」といった團體名で記されており、実際に、誰がその官地の拂下げを受けたかが分からないようになっていた。⁽¹⁴⁾當然ながら、奉天の在地有力者たちは自らの土地財産の形成に關して、その記録を容易に残すようなことはしていなかった。

こうした問題に直面するなかで、その後、次に示す日本語の文獻・史料などが張家の土地支配について有力な手掛かりを與えてくれることとなった。

①『滿洲舊慣調査報告書』にある昭陵密柴官旬地に關する記述

南滿洲鐵道株式會社の編纂した『滿洲舊慣調査報告書』は中國東北地域に對する日本の支配を確立するうえで必要な、土地に關する情報をまとめようとしたものであり、二〇世紀初頭の中國東北、つまり、當時の滿洲の土地制度、慣習についてかなり詳細な研究を行っている。報告書は『一般民地』『內務府官莊』『皇產』『典ノ慣習』『租ノ慣習』『押ノ慣習』といった一連の個別テーマの研究から構成されている。このうち、天海謙三郎のまとめた「皇產」という部分の一冊が本稿の課題と深く關わってきた。

辛亥革命後、民國政府が清朝皇室に與えた優待條件により、清朝皇室の「家產」とみなされた土地の權利は、そのまま清朝皇室に歸屬することが認められた。こうした土地は「皇產」と總稱された。具體的には、清朝の宮廷・陵寢の用度に供されてきた盛京內務府官莊、盛京戶部官莊、盛京禮部官莊などの各種官莊地、三陵所屬地、各種封禁地などが皇產とみなされた。すでに説明したように、舊奉天省の各地にはこうした皇產が廣く展開していた。『滿洲舊慣調査

報告書 皇產』はこうした皇產とされた土地の制度・歴史を概観したものである。この報告書の第五章「三陵所屬官地」は、その題名の通り、三陵に所屬した土地の沿革をまとめたものである。筆者が着目した部分はこの第五章の第二節「密柴官旬地」であった。⁽¹⁵⁾

ここで焦點となる昭陵の密柴官旬地は、元々、昭陵の甌瓦を製造するための柴薪・密土を採取し、密場を設置するために設けられていた。この土地は奉天城の西側に展開し、その面積は三萬畝以上にもなった。道光年間以來、この土地は三陵官員・壯丁によって占有され、かれらは三陵衙門に一定の租を納入していた。そして清末時までに、この密柴官旬地の上には三陵官員・壯丁の強い占有權が確立していた。『皇產』の本文はこうした密柴官旬地の制度・歴史を説明し、「参照」の部でその論據となった史料を指示している。筆者はそのなかで「参照七十」とある史料に着目した。そこには「旗地清查ノ際昭陵ノ密柴官旬地ヲ承種スル千丁ニ發給シタル照據（小作權確認證）」という説明がある。この史料は黒林子という集落の附近に展開していた約六五〇畝の昭陵密柴官旬地の土地の占有權（小作權）を、ある人物に對して確認している證書（宣統三年二月初二日附）である。⁽¹⁶⁾筆者は、その人物が張煥栢という名前を有していることに興味をもった。そこに「煥」という字があることから、筆者はこの人物を張煥栢、張煥相らの同族と考えたのである。この「参照七十」には出典の説明がなく、したがって、天海氏が何處でこの史料を見たのかは明らかでない。いずれにせよ、張家の土地支配についての檔案史料を考察するうえで、筆者はこの「密柴官旬地」という語が重要な手掛かりになり得ると推測した。

② 榊原農場に關する日本語史料

もう一つの手掛かりとなる語は意外な経緯から得ることができた。昭陵客棧官甸地と同じく、奉天市の北側に昭陵餘地という昭陵の所屬地が展開していた。この土地はホントイジの陵を保護するために設けられ、その面積は實に一四〇平方キロメートルを越える廣大なものであった。『滿洲舊慣調査報告書 皇産』によれば、清朝の時代、昭陵を中心に半徑約六キロメートルの地域に一般の人民が立ち入り、樹木の伐採、耕作などを行うことは固く禁じられていた。これが昭陵餘地である。しかし、實際には、清朝の末期までに、この土地のかんりの部分は三陵衙門に所屬した旗丁・陵戸らの手によって開墾されていた。また、かれらが一般の農民を佃戸として招き、その土地を耕作させている場合も少なくなかった。⁽¹⁷⁾辛亥革命後、この土地の權利をめぐって一つの興味深い事件が起こつてく

る。宣統帝退位の後、奉天都督趙爾巽、奉天鹽運使周肇祥らを中心とする數名の奉天地方政府高官は廣大な面積の昭陵餘地の存在に目を付け、偽名を用いて「溥豐農場公司」というペーパーカンパニーを設立し、清朝皇室からこの土地を借り受けた。趙爾巽らは官界にありながら民間人を装い、これらの土地の權利を清朝皇室から奪い取るうとしたのである。奉天城内をその一部に含んだこの地域の地價は確實に値上がりすることが豫想され、趙爾巽らはそこから莫大な利益を獲得しようとした。しかし、その後、奉天政界で實權を掌握した張作霖が趙爾巽らの行爲を摘發した。そこで、趙爾巽らは舊清朝皇室から借り受けていた昭陵餘地に關する權利を日本人の榊原政雄という人物に轉賣した。ここに、「溥豐農場」に代わり、「榊原

農場」という農場がこの廣大な地に設立された。榊原の土地權利獲得の背後には、日本の滿鐵、關東軍の資金援助・關與があつた。しかし、張作霖政權はこの榊原農場の土地を中國側に回收することを試み、この土地の返還をめぐって、舊溥豐農場公司と榊原農場の雙方の代理人の間で交渉が續いた。交渉の結果、溥豐農場側が榊原に日本圓二〇萬圓を支拂うこと、また、幾つかの補償條件を提示することで合意が成立し、榊原農場の土地權利の大部分は溥豐農場側に戻された。その後、これらの土地の權利は奉天省政府の手に移管され、その土地は民間に拂い下げられていった。なお、この時、一部の土地の租借權は榊原の手に残り、その問題が後の「榊原農場事件」となっていく。⁽¹⁸⁾

筆者は、たまたま、この舊昭陵餘地の問題について記した「奉天榊原農場ノ真相顧末ヲ陳情シ並ニ支那官憲ノ不法占據ニヨル占有回收ノ陳情請願」という文章に接する機会を得た。この文章はこの土地問題の當事者の一人であつた榊原政雄の代理人、辯護士中島忠利が昭和四(一九二九)年にまとめたものであり、榊原がかつて自分の有したとされる舊昭陵餘地の土地に對する權利回復を求めた陳情請願である。筆者が最初に見たこの文章は、中島忠利が當時の滿鐵東京支社庶務課長小林絹治に提出したものの寫しであり、戰後、米國に接收され、現在は米國議會圖書館に所藏されているものである。請願書という性格のため、この文章は榊原にとって都合のよい事柄のみを恣意的に解釋して記している可能性があるものの、そこには、昭陵餘地、溥豐農場、榊原農場と辿つたこの土地の係争の歴史が、要領よくまとめられている。さらに、筆者は日本の外交史料館にある溥豐農場、榊原農場關係の史料を閲覽し、明治末年以降、日

本の在奉天總領事がこの問題について外務省に行った報告などを検証した。⁽²⁰⁾そこにも、當時の日本總領事館から見た溥豐農場、榊原農場問題の構圖が明瞭に記されている。

中島忠利の「陳情請願」、日本の外交文書の記述から明らかにした事柄のなかで、重要な点の一つは、榊原農場の返還交渉のなかで、榊原農場、溥豐農場の代理人を務めた人物の名前が浮かび上がってきたことである。榊原の代理人は當時の日本の衆議院議員であった細梅三郎、奉天商業界の有力者である原口聞一であった。そして、溥豐農場側の代理人こそ、本稿が取り上げている張家の息子である張煥柏（張裕の兄）であった。「陳情請願」、これら外交文書のなかには、當時、張煥柏が舊昭陵餘地の土地と耕作者を在地で支配していた人物の一人であり、この交渉のなかで、その仲介人として、重要な役割を果たしていたことが記されている。

このように、いくつかの日本語史料から、「審柴官甸地」「昭陵餘地」「溥豐農場」「榊原農場」という語が、張家の土地支配の内容を明らかにするうえで重要な手掛かりとなり得ることを確認し、筆者は、改めて、遼寧省檔案館の所蔵史料の調査に着手した。

3、土地關係檔案史料の考察

①昭陵審柴官甸地に關する檔案史料

「昭陵審柴官甸地」という語を手掛かりに遼寧省檔案館の所蔵史料を調べたところ、そのなかに一卷の檔案史料を見いだすことができた。それが、「奉天省長公署全宗」にある「丈放三陵審柴官甸地畝冊及丈放章程布告 民國五年十月」（卷號三二七六五）という史料である。⁽²¹⁾筆者はすでにこの史料を用いて、昭陵審柴官甸地の問

題について論じたことがあるので、その詳細は拙稿を参照されたい。⁽²²⁾この史料は奉天督軍兼省長張作霖の名前で發布された昭陵審柴官甸地の丈放に關する布告（民國五年一〇月二十四日附）とその土地臺帳からなる。布告は縦一メートル、横五四センチメートルの大きな紙に記されており、「前言」にあたる文章と二〇の條文からなる。「前言」は審柴官甸地を拂い下げるにいたった経緯、その目的を述べている。それによれば、道光八年以降、三陵衙門は審柴官甸地の土地を所屬する莊丁に發給し、その耕種を許し、かれらから一定の租を徴収していた。しかし、清末以降、一部の莊丁がこの土地の權利を、「抵押」という形式をとって、事實上、外國人（日本人）に賣却しており、その面積は八千畝以上にも及んでいた。したがって、奉天省は審柴官甸地の調査、その整理・拂い下げを行い、それにより、外國人のこの土地に對する權利を排除するとしている。また、これにより、審柴官甸地の拂い下げを受ける莊丁は土地所有權を、舊清朝皇室は拂い下げによる地價收入を、地方政府は地稅收入を得ることになり、各方面の受ける利益は大きいとしている。布告は、さらに、審柴官甸地の拂い下げの具體的な方法・手續き、例えば、土地は三陵莊丁に優先的に拂い下げること、拂い下げの地價、各種手数料、地價の拂込期限、地稅の徴收開始時期などを、各條文で規定していた。

一方、土地臺帳は縦二〇センチメートル、横二四センチメートルの大きな紙片を綴じたものであり、そこには、民國五年に實施された土地調査の記録が残されている。計四冊からなる臺帳は相當傷んでいるが、その内容はほぼ判讀できる。臺帳の各葉の表裏にはそれぞれ二つの地段ごとの記録が残されており、各地段ごとに、第一

行目に佃戸（土地を占有していた三陵莊丁）の名前、土地の座落、第二行目に土地の上・中・下則の別とその面積、第三行目に土地の四至が記されている。また、各土地に關する追加的な備考が臺帳の餘白や添附された紙の上に書き込まれており、當時の審柴官旬地の實情を知るうえで、そこにある情報は重要である。それらは、その土地の拂下げが實際に行われたか否かを示す記述、土地の拂下げを實際に受けた者の名前、臺帳に名前のある三陵莊丁がさらに土地を出佃していた場合にはその佃戸名、日本人への土地の抵押・土地權利の相續などがある場合にはその内容についての記載などである。また、資力を缺くなどの理由により、土地の拂下げを希望しない莊丁はその旨を記した「具結」を提出したが、その「具結」がこの臺帳に添附されていた。

問題は臺帳に記載されていた三陵莊丁の名前である。審柴官旬地を占有している莊丁として、そこには三三七人の名前があった。そのなかには、ある程度の廣さの面積の土地を占有している者もあったが、その多くは數畝から二〇畝程度の、わずかな面積の土地の權利を有しているにすぎなかった。そうした莊丁のなかで、ただ一人廣大な面積の土地權利を有する人物として、臺帳の多くの頁には張煥柏の名前が記載されていた。かれは昭陵審柴官旬地が展開していた黒林子、永安橋、破堡子などの土地の隨所に合計二千二百畝以上もの土地を有していた。そして、審柴官旬地の多くの土地を西宮房次郎、小寺洋行などの日本人に賣却し、張作霖の摘發を受けていたのもこの張煥柏であった。占有していた土地の廣さが他の三陵莊丁とは桁違いに大きいこと、また、日本人への土地賣却に指導的役割を果たしていたことから、この張煥柏が昭陵審柴官旬地の土地、耕

作者に強い影響力を有する人物であったことを窺うことができる。この張煥柏こそ、本稿の着目した張家の息子、張裕（張煥裕）の兄であった。また、先に記した『滿洲舊慣調査報告書 皇産』の「參照七十」にあった張煥柏とは恐らく同一人物であろう。

土地臺帳をさらに詳細に調べてみると一つの興味深い事實に気がついた。それは、そこに記載されている張煥柏の名前の一部は、糊で張り附けられた紙の上に書かれていたことであり、その紙の下にも文字が記されているようであった。そこで、檔案館閲覧室の窓ガラスを使って紙を透かしてみたところ、その下には「張煥裕」という名前が記されていた。つまり、一九二二年に張裕が殺害された後、かれの有していた昭陵審柴官旬地の土地權利は兄の張煥柏によって引き繼がれていたのであろう。張煥裕と張煥柏の名前で元々登録されていた土地面積がほぼ同じであったことから、これらの土地に對する權利はかつて張欽善が有し、その息子である張煥裕、張煥柏がそれを相續したと想像できる。いずれにせよ、この土地臺帳の糊附けされた部分を判讀することにより、張家、また、張裕と三陵所屬地との直接的な關係、そして、臺帳に記載された張煥柏という人物が張裕の兄であったことを確認できたのである。現在、遼寧省檔案館ではこの「奉天省長公署全宗」を含め、その所藏史料のマイクロフィルム化が進んでいるが、マイクロフィルムでこの檔案を閲覧したならば、この紙を張りつけた部分には氣づかなかつたかもしれない。

②三陵餘地、溥豐農場、柵原農場に關する檔案史料
次に、「三陵餘地」、「溥豐農場」、「柵原農場」という語を手掛か

りに、これと直接關係する檔案史料を探してみるとその数は六つもの案巻となり、その全てが「奉天省長公署全宗」のなかに収められていた。このうち、多くの史料は民國一〇（一九二一）年以降のものであり、いわゆる「柳原農場事件」に關しての記録である。この事件は既に説明したように、民國四（一九一五）年に柳原農場の土地が中國側に返還された後も、その一部である百餘町歩の水田が柳原の手に残り、その回收を圖る中國側とそれに抵抗する柳原との間で長く繰り廣げられた事件である。例えば、「日人柳原租昭陵水旱田不交租情形 民國十年」（案卷番號二二二六）、「日人柳原農場拖欠三陵衙門地租層值不納以致雙方先后派兵前往北陵附近等情 民國一三年」（案卷番號二二四七）などには、當時の外交部特派奉天交涉員修兆元、同鍾世銘の記した報告書（民國一一年八月、同民國一三年七月）、また、外交部奉天交涉署が日本の在奉天總領事にあてた書簡の下書き（民國一〇年七月）などが収められている。それらの文書には、柳原が三陵衙門の土地を租借していたにも関わらず、その租を滞納し續けていたこと、また、この土地の回收を圖る中國側と柳原農場側の衝突の経緯などが詳しく記されている。興味深いことに、これらの史料のなかには、この土地の所有者の代理人として、三陵衙門協領の壽聿彰の名前が隨所に記されている。壽聿彰は後に滿洲國の地積整理局長となった人物である。筆者は外務省外交史料館の文書などを利用して、滿洲國時代の東亞勸業株式會社の有した農場土地のかんりの部分がかつては清朝皇室の家産であった可能性を論じたことがある。²⁴ 同様に、これらの檔案史料からも、舊清朝皇室と滿洲國時代の土地問題との關係の一端を窺うことができよう。

さて、本稿が着目する溥豐農場、柳原農場へと辿る三陵餘地の歴

史、また、民國初頭の柳原農場の返還交渉に關する檔案は二件を見いだした。それらは、「關於贖回被日人柳原盜買之昭陵明堂附近溥豐農場地畝各種 民國四年」（案卷番號二二二四）、「溥豐農場將陵地租與日人柳原及收回經過情形 民國五年」（案卷番號二二二五）²⁵である。張家の土地支配の問題と關わり、前節で説明した中島忠利の「陳情請願」、日本の外交文書の内容と直接對應する史料が案卷二二二五の檔案であった。

この案卷二二二五は雑多な文書からなる檔案である。そこには、盛京兼金州副都統の三多が瀋陽縣知事趙恭寅に宛てた公函（洪憲元年三月二四日）、奉天巡按使段芝貴の瀋陽縣に對する飭令（民國五年一月一六日）、奉天省長公署の瀋陽縣知事への訓令（民國六年六月）などが収められている。これらの文書は、民國四年の柳原農場返還交渉の締結後も、なお、柳原が水田百餘町歩を租借したことを記し、柳原にその境界を遵守させるよう、また、三十年の租借期間が経過した後は直ちにこの土地を三陵衙門に返還させるよう指示している。これらの文書のなかでも張煥柏の名前が擧げられ、かれが溥豐農場を代表し、柳原農場返還交渉のなかで中心的役割を果たしていたことが記されている。また、この案卷のなかには柳原農場返還をめぐる契約書等の原本が収められている。その契約書は、外務省外交史料館に所蔵されている在奉天總領事矢田七太郎の本省への報告、また、中島忠利の「陳情請願」に記されていた内容を裏付けていた。契約書の最後には、柳原政雄代理人として細梅三郎、原口聞一、溥豐公司股東委託人として張煥柏、立會人として江藤豐二、趙秀降が署名捺印していた。また、「右承認する」と記し、在奉天總

領事代理領事矢田七太郎の名前とその官印が添えられていた。また、この案卷には、張煥柏が交渉の相手方である細梅三郎、原口聞一に金三萬六千圓の謝禮を支拂った證文、また、原口聞一が張煥柏に對し、榊原の手に百町歩の水田を租借の形で残すよう依頼した文書が収められていた。なお、この案卷にはこの溥豐農場問題とどのような關係があるのか分らない史料も含まれていた。それは、*Y.M.C.A.* という人物が張煥柏に送ったと思われる、日附のない英文の葉書であり、自分の米國からの歸國豫定をシカゴの *YMCA* ホテルの繪はがきに記したものである。

張煥柏は溥豐公司委託人とされていたが、そもそも、かれが溥豐農場とどのような關係にあったかは明らかでない。しかし、案卷二二五にある各種文書、契約書類などから、辛亥革命後、張煥柏がかつて自らの家が管理した昭陵餘地を引き續き在地で支配し、この土地の權利の歸屬をめぐる係争のなかでは、省政府と一私人となつた舊清朝皇室との間の、また、溥豐農場と榊原農場との間の仲介人として振る舞う、ブローカーのような役割を果たしていたことが浮き彫りだされてきた。

筆者は張家の大地主としての據頭と舊皇産の解體との間に密接な關係があるだろうとの假説をたて、昭陵舊紫宮旬地、昭陵附屬地、溥豐農場、榊原農場をめぐる檔案史料を考察した。これらの檔案史料は張家が舊皇産の土地を自らのものとしていく過程を直接的には記していなかったが、確かに、張家と舊皇産との深い關係を具體的に示していた。これは檔案史料を考察することによって初めて確認できた事實であつた。奉天一の大地主と言われた張家の有した土地のかんりの部分は、三陵衙門の官員として、同家がかつて管理して

いた土地であつたことを裏付けていると言つて良いであらう。「公的」な財産が解體されるなかで、その管理に携わつていた人々がその財産を私有化していく、このことは經濟史研究から見ても興味深い課題である。

三 奉天における辛亥革命と檔案史料

1、奉天における辛亥革命

張家による土地支配の問題と比較するならば、辛亥革命の指導者としての張榕の足跡を、檔案史料から辿ることは比較的容易である。奉天における辛亥革命、張榕がそこで果たした役割についてはこれまでにもいくつかの研究があり、關係する檔案史料選もいくつか刊行されている。

日露戦争後の一九〇七（光緒三三）年、清朝はそれまでの盛京、吉林、黑龍江將軍による東三省の軍政支配を廢し、この地域に關内各省と同様の總督巡撫制をしいた。初代の東三省總督として徐世昌が任命され、さらに、一九〇九（宣統元）年にその職を繼いだ錫良のもので、この地域では行政機構をはじめとする、各種の制度改革が進められた。前節で論じた官莊旗地制度の解體、その民有地化もそうした改革の一環として行われた。省・州・縣という「民衙門」に權力の基盤を置いた清朝の地方官は、内務府をはじめとする「旗衙門」が持つていたこの地域における權益を浸食し始めたのである。

徐世昌、錫良の進めた政治の柱の一つは、この地域の在地勢力を組織し、かれらを利用することで義和團事件・日露戦争後の地域秩

序の混乱に終止符を打ち、半ば麻痺していた省の行政機構を再構築することであった。「光緒新政」さらに、その後の「立憲運動」が展開するなかで、各省では「省議會」的な諮議局が設けられていったが、奉天省もその例外ではなかった。諮議局などの「自治機關」が設けられていく過程で、この地域の在地勢力は政治的に結集し、その中から、袁金鎧のような後の奉天政界の重鎮も擡頭してきた。立憲運動が高揚するなかで、かれらは自己の政治参加を強く主張していった。清朝の時代、「本籍回避」の原則により、地元出身者が各地の地方官を務めることは禁じられていたが、こうした在地勢力の動きは清朝の中央集権的な體制を危うくするものであった。

こうした在地勢力の擡頭という視點から、この地域における辛亥革命の意味を理解すると興味深い。つまり、奉天における辛亥革命をこうした在地勢力が公的な權力を獲得していく一つの重要な契機としてとらえる見方である。その意味で、この時期、奉天において重要な役割を果たした暫定的な行政機關が奉天保安公會であった。

詳しくは筆者の舊稿を参照されたいが、奉天保安公會は總督趙爾巽を頂點とする省政府高官と地方有力者の連合體であり、この機關が實質的な省行政を擔っていた。奉天保安公會の總會長は總督趙爾巽、また、外交部などの各部の部長には奉天交渉使の許鼎霖などの清朝官僚が務めた。一方、會の中樞である參議部總長には袁金鎧、また、各部の副部長には張榕、于冲漢などの在地勢力の有力者が務めた。奉天保安公會を實際に擔った人々はこれら在地有力者であり、北京から派遣されていた清朝の地方官はすでに實質的な統治能力を失いつつあった。⁽²⁷⁾ 奉天における辛亥革命の歴史を「革命」「反革命」との衝突という視點からだけでなく、このように、在地勢力

による權力掌握の過程という視點からもとらえてみると、檔案史料の考察が大變重要になってくる。そこには、當時の政治の生々しい動きが、日々の記録として詳細に残されている。「革命」の動きを主軸に、過去を回想した『文史資料』などに收められた文章とはその史料性格をいささか異にしている。

2、檔案史料集の刊行

清末期の奉天地方政治に關する一次史料をまとめた刊行物の數は意外に多い。徐世昌の『東三省政略』、『退耕堂政書』、また錫良の『遺稿奏稿』などが早い時期から参照可能であり、これら史料を利用することにより、清末のこの地域の政治・社會について研究した成果も生み出されていた。一九八〇年代になると、檔案史料に對する本格的な關心が高まり、第一歴史檔案館などがその所藏史料の整理を精力的に進めていった。そうしたなかで、中國第一檔案館編『清代檔案史料叢編 第八輯』が刊行された。⁽²⁸⁾ この史料集は「東三省辛亥革命史料」という副題をもち、第一歴史檔案館が所藏する「趙爾巽全宗檔案」の一部を整理・編集したものである。中國第一歴史檔案館の所藏史料については「中國第一歴史檔案館藏檔案概述」などに詳しい。また、「趙爾巽全宗檔案」の來歴、その内容については、上記の『清代檔案史料叢編 第八輯』に詳しい解題がある。⁽²⁹⁾ 一方、奉天の辛亥革命については、遼寧省檔案館編『辛亥革命在遼寧檔案史料』、瀋陽市檔案館編『辛亥革命在瀋陽』も相次いで刊行された。⁽³¹⁾ 『辛亥革命在遼寧檔案史料』は遼寧省檔案館所藏の「奉天省長公署檔案」「復縣公署檔案」「瀋陽縣公署檔案」などから、關連する檔案史料を選んでまとめたものである。また、『辛亥

革命在瀋陽」は瀋陽市檔案館所藏の檔案から、關係する史料を影印したものである。但し、どちらの史料集にも、そこに收められている檔案の目録番號などは付されていない。

これら三編の檔案史料選を読み進めることにより、奉天の辛亥革命については、檔案史料という一次史料から詳しい考察を行うことが可能となった。筆者の場合、『清代檔案史料叢編 第八輯』、『辛亥革命在遼寧檔案史料』に目を通し、その後、中國第一歴史檔案館、遼寧省檔案館を訪れるという作業の順番となった。残念ながら、瀋陽市檔案館の所藏史料を閲覧する機会はまだ得ていない。ここでは、筆者が刊行されたこれら檔案史料選を読み、そのうえで、檔案館所藏の檔案、そのマイクロフィルムを閲覧し、そこで気づいた點をいくつか述べたい。

3、張榕に關する檔案史料

張榕、その生家である張家の歴史に着目し、奉天地方勢力の擡頭を考察しようとする筆者にとって、上記三編の檔案史料集には關連する文書が豊富に含まれている。そこには、張榕の日々の動き、かれと關わる地方政治の動向、さらに、かれの家族、財産、交際關係などが事細かに記されている。それら史料を読むことにより、「革命家」としてとらえられる張榕だけでなく、清朝の家産に經濟的、社會的基盤を置き、豊かな財産を擁する地方有力者の息子、また、辛亥革命の混亂のなかで、奉天各地の有力者を組織し、自己と政治的立場を異にする清朝官僚、民間有力者、あるいは、一部の日本人などとも深い關係を保ち、地方社會で強い政治力を行使していく張榕の姿が浮かび上がってくる。換言すれば、これまでの研究史が規

定してきた張榕の歴史的位づけに必ずしもこだわることなく、例えば、在地勢力の一方の雄としての張榕の姿に迫ろうとするとき、一次史料であるこれら檔案史料の存在が重要になる。ここでは、そうした點を例示するようないくつかの檔案を舉げてみたい。

張榕に關する檔案史料のなかで、興味深いものの一つに當時の官憲の尾行記錄がある。例えば、『有關張榕等人活動的探報（十三件）宣統三年』（『清代檔案史料叢編 第八輯』所收）には、そうした文章が多數收められている。その一部を抄譯してみると、「張榕が先に天津から逃亡した際に行動を伴にした獄官の王某という者が既に奉天に戻り、張榕の家に住んでいる」「二二日午前七時、張榕は馬車に乗り、兄の張煥柏は駕籠に乗り、驛に向かった。張榕は北京において袁內閣に謁見を求め、その後、上海に行く」と稱している。張煥柏は海龍に赴いたが、その用向きは分からない。「昨日、張榕の兄である張煥柏とその妻の母方の伯父である楊際青は洪受卿、張海亭らと東山營盤等に赴いた。情報によれば、その地の鄉團と連絡をとることと關係があるらしい。洪は東山において大變勢力がある」「張榕が辮髪を有する一人の人物を伴い、關内からもどった。その人物の年齢は三〇歳ほどであり、昭陵衙門に居住し、毎日、張榕の家がその食事を運んでいる」「一三日夜、海龍に赴いていた張榕の兄、張煥柏が滿鐵を利用し、奉天に戻った」「調査によれば、過日、張榕は大連に住む日本人の田島材之助を迎え、田島は（張宅で）二夜を過ごした。現在、田島は日本租界に住んでいる」「一四日午後二時、日本人の田島材之助が自轉車で張榕の家を訪ね、一時間ほど滞在した」「張榕の家では連日人が集まって會議をしている。門前の馬車、人力車は數十兩にもなっている。四人の人

物が門外を守っており、人が近づくとこれを追い拂っている」「調査によれば、先に昭陵四品官衙門から逃亡した肖潤芝が初八日に奉天に戻り、張榕の家の門外の廂房に住んでいる」といった具合である。こうした當時の行政が残した文章から、張榕、張煥柏らが奉天各地の在地勢力の組織化に務めていた日々の様子、また、張榕らと一部の日本人との深い関わり、張家と三陵との関係などを具體的に確認できる。

張榕は奉天における同盟會の指導者であったが、他方、袁金鎧は「革命」を壓制した總督趙爾巽の懷刀として知られていた。『清代檔案史料叢編 第八輯』には、袁金鎧が各地の有力者から情報を集集し、總督趙爾巽にその内容を逐一報告していた記録が多數残されている。例えば、「袁金鎧致趙爾巽稟文 宣統三年十月（文書番號一五七）」という文章は、袁金鎧が總督趙爾巽に對し、その報告の前日に張榕と會っていたこと、その席で、張榕から貴重な情報を得たことを記したものである。⁽³³⁾それによれば、袁金鎧は張榕らに對して彈壓が迫っていることを知らせ、奉天からの退避を勧めた。それに對し、張榕は反清運動指導者たちがそうした動きに如何に對應するか、自分の考えを述べたという。こうした檔案史料から、奉天有力者たちがその政治的立場を異にしたがらも、他方では相互に密接に繋がっていたことを推測できる。事實、辛亥革命後、こうした有力者たちは連携して政治的擡頭を遂げ、省權力を掌握していったのである。

『辛亥革命在遼寧檔案史料』『辛亥革命在瀋陽』には、張榕の殺害を報告する張作霖の呈文（宣統三年二月初六日）、趙爾巽の批（同一二月初九日）が收められている。⁽³⁴⁾上述のように、後者の史料

集には實際の檔案の影印が收められている。そこには、宣統三年二月初五日（一九一二年一月三日）、張作霖の配下にあった偵探長于文甲が張榕を逮捕しようとしたが、張榕は拳銃を發射してこれに抵抗したこと、于文甲はそうした張榕を射殺した後、かれの家を急襲し、「匪黨」に關する證據書類を多數押収したことが記されている。この檔案は奉天の辛亥革命に關する史料のなかでも良く知られたものであり、遼寧省檔案館の展覽室にも陳列されている。因みに、この日、張榕は袁金鎧と會食し、その歸宅途中に暗殺された。しかし、袁金鎧の日記である『備慮日記語存 附經過自述』にはその日の事は何も記されていない。⁽³⁵⁾

辛亥革命によって民國政府が成立すると、暗殺された「匪黨」の指導者張榕は一轉して革命の英雄となった。そのため、張作霖の配下による張榕の殺害、その財産收奪に對しての補償問題が浮上してきた。『辛亥革命在遼寧檔案史料』には「（三）爲張榕等請恤并請發還損失財產 一張煥柏致張錫鑾呈 三月十日」という史料が收められている。これは張煥柏が都督張錫鑾に對し、張作霖の配下により略奪された張榕の財産の補償を求めた文章である。そこには、小北關容光胡同にあった張榕の家をはじめとして、破壊・略奪された張家の財産の品目、その評價額が記されており、その合計は藩平銀五萬三千三百五十七兩にも上ったとある。そこにある多數の高價な衣料品、裝身具、骨董品、書畫、車馬などの品目、ロシア幣一萬五千五百ルーブル、東三省小銀元一萬四千四百四十五元といった記述から、當時の豊かな張家の生活の一端を具體的に垣間見ることができ⁽³⁶⁾る。

張榕の殺害に關して中國第一歴史檔案館に所藏されている「趙爾

翼全宗檔案」にも興味深い文章がある。「五九七 内務部等處理革黨の張榕被戮事の有關文電 民國元年四月至九月」には、張榕の姉である張桂（張煥桂）の大總統袁世凱に宛てた呈文が収められている。その文章のなかで、張桂は張榕殺害の犯人として趙爾巽と張作霖を裁判に付すよう求めており、そこには殺された弟を思う彼女の思いが切々と述べられている。この檔案などは、張榕に關して考察を行う場合には是非とも參照したい文章である。

なお、「趙爾巽全宗檔案」には『清代檔案史料叢編 第八輯』には収められていないが、研究課題によっては重要な意味を持つ檔案史料が少なくない。その一例を挙げれば、總督趙爾巽の生家は奉天鐵嶺の有力者であり、何人もの科擧合格者を輩出したことで知られているが、この趙家の族譜に關わる史料なども「趙爾巽全宗檔案」に収められている。⁽³⁸⁾

以上のように、奉天の辛亥革命、そこでの張榕の果たした役割については、刊行された史料集を用いることにより考察を進めることが可能であった。また、上記の趙家の族譜關連の史料の場合が示すように、編纂された史料集には収められていない、しかし、重要と思われる檔案も決して少なくない。このことは遼寧省檔案館の所藏史料についても言えた。「奉天省長公署全宗」にある辛亥革命期の檔案史料は相當な數になるが、そのなかで『辛亥革命在遼寧檔案史料』に収められている史料はそのごく一部にすぎない。可能ながきり、檔案館を訪ね、目錄を檢索し、直に檔案に接することが望まれよう。筆者の場合も、實際に檔案館で史料に目を通すことにより、史料集には収められていない興味ある檔案を見いだしただけでなく、どのような便箋に文章が記されていたか、帳簿の欄外にどのような

書き込みがあったか、糊附けされた紙の下にどのような文字があったかということなどから、興味深い事實を確認できたこともあった。

結びに代えて

自分の研究關心に即して、歴史上のある特定の人物や事件などについて記された檔案史料を見いだすことは必ずしも容易でない。關連する檔案史料が存在するとしても、そもそも、目指す史料がどの檔案館に所藏されているのか、また、如何なる全宗のもとに整理されているのか、その目錄番號などはどうなっているのかといった點を一つ一つ明らかにしていく必要がある。また、目指す檔案史料の所在を確認できたとしても、特に、近現代史に關する檔案などの場合には、そうした檔案がどの程度公開されているのかという點も重要になってくる。この點で、『中國檔案館指南叢書』などの刊行により、最近では中國各地の檔案館が所藏する史料、その概要などについてかなり詳しい情報を得ることが可能となってきた。

本稿は、筆者が遼寧省檔案館、第一歷史檔案館などで行った史料調査の経験に基づいて、檔案史料利用の可能性、その難しさといった問題について初步的な考察を行った。實際に檔案史料の閱覽を始めてみると、個々の檔案の内容が非常に細かいこと、そして、目を通すべき檔案の分量があまりに多いことで當惑することが少なくない。多くの檔案は日常的な官廳の業務から作成された文書であり、その一つ一つを繙いて、ある特定の人物や事柄に關する記述を探し出していくことは、しばしば、相當な時間と根氣のいる作業となってくる。したがって、自己の研究課題と直接に關わる人物や事件についてまとまった記録のある檔案に、如何に效率的に辿り着くかと

いう點が重要となってくる。

筆者の場合、まず、第一に、日本語の史料・文獻を積極的に利用することにより、まず、關心のある人物や事件の概略を考察し、そこから、檔案史料を考察するうえで手掛かりとなる語彙を抽出していった。そうした作業を行って、初めて、遼寧省檔案館などに所蔵されている檔案を本格的に利用することが可能となった。この手法は中國東北地域史研究に與えられた一つの大きな利點であるかもしれない。しかし、他の地域の歴史を考察する場合にも、膨大な分量の檔案史料を目の前に置くことを考えると、關連する各種史料・文獻などをあらかじめ驅使し、檔案史料を検索するために必要な語彙を抽出しておくことが是非とも必要であらう。

第二に、筆者は政治的に重要度の高い官衙の檔案に史料調査の重點を置いた。筆者が關心を有する奉天における官地拂い下げの問題などの場合、日常的な官地拂い下げ業務を行った官地清丈局の史料よりは、その上級官廳である奉天省長公署の檔案に多くの興味ある史料を見いだすことができた。なぜならば、政治的な判斷を必要とする案件は官地清丈局から奉天省長公署に送られていたからである。このように、檔案史料を考察する場合、文書を起草した官廳だけでなく、むしろ、そうした文書の送付先にあたる上級官衙の檔案に十分な注意を向ける必要がある。その意味で、檔案史料を利用した研究を進めるにあたっては、中國の文書學、つまり、檔案學の基礎的な知識を習得することも必要であらう。

註

(1) 拙稿『舊奉天遼陽の郷閭指導者、袁金鎧について』『一橋

論叢』一〇〇巻六號、一九八八年十二月、同『舊奉天省撫順の有力者張家について』『一橋論叢』一〇二巻六號、一九八九年二月、同『奉天地方官僚集團の形成』『一橋大學研究年報 經濟學研究 三一』一九九〇年五月。

(2) 拙稿『辛亥革命後、舊奉天省における官有地の拂い下げについて』『一橋論叢』九八巻六號、一九八七年十二月などを参照のこと。

(3) 拙稿『舊錦州官莊の莊頭と永佃戸』『社會經濟史學』五四巻六號、一九八九年三月などを参照のこと。

(4) 遼寧省檔案館編『中國檔案館指南叢書 遼寧省檔案館指南』(中國檔案出版社、一九九四年)三十七頁。

(5) 同書、六〇—六二頁。

(6) 舊記整理處については、彌吉光長『舊國立奉天圖書館の檔案始末記』『岩井博士古稀記念典籍論集』(開明堂、昭和三年)七八—七九二頁を参照のこと。

(7) 『奉天官地清丈局全宗』『奉天省長公署全宗』などは、各巻に收められている檔案の分量が一般に多い。これに對し、吉林省檔案館に收蔵されている、例えば、『吉林省民政司全宗』にある各巻の檔案の分量などは比較的少ない。各檔案館における檔案整理の仕方、また、各檔案の原存機關の違いなどによって、こうした差異が生じるのかもしれない。吉林省檔案館については、拙稿『吉林省檔案館における清末期の檔案史料調査』『近現代東北アジア地域史研究會 ニューズレター』第九號、一九九七年二月などを参照された。

(8) 前掲『遼寧省檔案館指南』四九—五五頁。

- (9) 秦誠至「辛亥革命與張裕」中國人民政治協商會議全國委員會文史資料研究委員會編『辛亥革命回憶錄 第五集』(文史資料出版社、一九八一年)所收。

- (10) 南滿洲鐵道株式會社編纂(天海謙三郎筆)『滿洲舊價調查報告書前編ノ内 皇産』(南滿洲鐵道株式會社、大正三年)二六七—二六八頁。

- (11) 「旗務處送送旗職人員應行編列綽紳名單」〔遼寧省檔案館所藏「奉天省長公署全宗」(案卷番號一〇五三)〕。

- (12) 南滿洲鐵道株式會社經濟調查會編(天野元之助筆)「東三省官憲有力者の土地所有狀況(昭和三年三月調)」『滿洲經濟の發達』(南滿洲鐵道株式會社、昭和七年)四一頁。

- (13) 園田一龜『奉天派の新人と舊人』(奉天新聞社、大正三年)一〇〇—一〇二頁。

- (14) 「各王府地價清冊」〔遼寧省檔案館所藏「八旗地畝冊」(文書番號一四五)〕。

- (15) 前掲『滿洲舊價調查報告書前編ノ内 皇産』二二六—二三四頁。

- (16) 同書、「參照」一〇五—一〇六頁。

- (17) 同書、二三四—二五二頁。

- (18) 三陵餘地、溥豐農場、柳原農場の問題の詳細については、拙稿「土地利權をめぐる中國・日本の官民關係—舊奉天の皇産をめぐる—」『アジア經濟』第三八卷一號、一九九七年一月を參照のこと。

- (19) 中島忠利「奉天柳原農場ノ真相顯末ヲ陳情シ並ニ支那官憲ノ不法占據ニヨル占有回收ノ陳情請願」(昭和四年一〇月二

七日)。

- (20) 「日本外務省外交史料館所藏 外務省記錄」一、七、七、一一—「滿洲ニ於ケル農場經營關係雜件 柳原溥豐農場」(全四冊)。

- (21) 「丈放三陵署柴官甸地畝冊及丈放章程布告」〔遼寧省檔案館所藏「奉天省長公署檔案」(文書番號三二七六五)〕。

- (22) 拙稿「辛亥革命後、舊奉天省における官地の拂い下げ—昭陵署柴官甸地の場合—」『東洋史研究』第五三卷三號、平成六年二月。

- (23) 「日人柳原租昭陵水旱田不交租情形 民國十年」〔遼寧省檔案館所藏「奉天省長公署檔案」(案卷番號二二二二)〕、「日人柳原農場拖欠三陵衙門地租層值不納以致雙方先后派兵前往北陵附近等情 民國十三年」〔同「奉天省長公署檔案」(案卷番號二二四七)〕。その他、柳原農場關係の檔案として「瀋陽市日人柳原擅圍地基侵佔馬路情形 民國十九年」〔同「奉天省長公署檔案」(案卷番號二二二八)〕、「瀋陽縣呈日人神原侵佔土地情形 民國十三年」〔同「奉天省長公署檔案」(案卷番號二二四六)〕などがある。

- (24) 拙稿「東亞勸業株式會社と清朝皇産の歴史」『近現代東北アジア地域史研究會 ニューズレター』第一〇號、一九九八年二月。

- (25) 「關於贖回被日人柳原盜買之昭陵明堂附近溥豐農場地畝各種 民國四年」〔遼寧省檔案館所藏「奉天省長公署檔案」(案卷番號二二二四)〕、「溥豐農場將陵地租與日人柳原及收回經過情形 民國五年」〔同「奉天省長公署檔案」(案卷番號二

(二二五)。

- (26) 清末・辛亥革命期の奉天における「新政」の展開、革命運動の高揚などの動きについては、早くから、中國科學院歷史研究所・吉林師範大學歷史系編『近代東北人民革命運動史』、李時岳『辛亥革命時期東三省革命與反革命的闘争』一九五九年第六期、西村成雄『東三省における辛亥革命』『歷史學研究』三五八號、一九七〇年、などがある。また、錫良についての研究として、Des Forges, Roger, *Hsi-tung and the Chinese National Revolution* (New Heaven: Yale University Press, 1973) を挙げることにせよ。

- (27) 前掲、拙稿「奉天地方官僚集團の形成」を参照。
 (28) 中國第一歷史檔案館編『清代檔案史料叢編 第八輯』(中華書局、一九八二年)。
 (29) 中國第一歷史檔案館編著『中國第一歷史檔案館館藏檔案概述』(檔案出版社、一九八五年)。
 (30) 李鵬年『趙爾巽全宗檔案概述』[前掲『清代檔案史料叢編 第八輯』三九五—四一九頁]。
 (31) 遼寧省檔案館編『辛亥革命在遼寧檔案史料 記念辛亥革命七十周年』(一九八一年)、瀋陽市檔案館編『辛亥革命在瀋陽 記念辛亥革命八十周年』(瀋陽出版社、一九九一年)。なお、『辛亥革命在瀋陽』には瀋陽における辛亥革命の歴史を概述した鮑偉光『辛亥革命在瀋陽』、また、張榕、袁金鎧、趙爾巽、張榕の自宅、張榕の殺害現場の寫眞などが収められている。

- (32) 『二九八 有關張榕等人活動的探報(十三件) 宣統三年』

[前掲『清代檔案史料叢編 第八輯』一六五—一七〇頁]。

- (33) 「一五一 袁金鎧致趙爾巽稟文 宣統三年十月」[前掲『清代檔案史料叢編 第八輯』九一九—九二頁]。

- (34) 「1、張作霖給趙爾巽的呈文 宣統三年十二月初六日」[前掲『辛亥革命在遼寧檔案史料』一二三—一二五頁]、「二三 關於張榕、寶昆、田亞贊遇害及高恩博、王恩紹等被抓、張作霖給趙爾巽的呈文 宣統三年十二月初六日」[前掲『辛亥革命在瀋陽』一八—二二三頁]。

- (35) 袁金鎧『備慮日記語存 附經過自述』(民國二四年) [遼寧省圖書館所藏]。

- (36) 「(三) 爲張榕等請恤并請發還損失財產 中華民國二年三月一五月」[前掲『辛亥革命在遼寧檔案史料』一三九—一四四頁]。同じく、「二九 爲張榕等請恤并請發還損失財產 張煥柏致張錫呈 中華民國二年三月十一日」[前掲『辛亥革命在瀋陽』一三八—一四一頁]。

- (37) 「內務部等處理革黨的張榕被戮事的有關文電 民國元年四月至九月」[中國第一歷史檔案館所藏『趙爾巽全宗』(順序號五七七)] [前掲『清代檔案史料叢編 第八輯』二二七頁]。
 (38) 「趙爾巽倡修族譜的文告和〔趙氏族譜〕〔趙氏族譜世系表〕及有關函件 光緒三十四年至宣統元年」[中國第一歷史檔案館所藏『趙爾巽全宗』(順序號五〇九)]。

筆者は平成九年——一年度の文部省科學研究費補助金〔基盤研究(A)〕「近代中國東北における社會經濟構造の變容」〔研究代表者：江夏由樹〕により、遼寧省檔案館、中國第一歷史檔案館

において史料調査を行うことができた。本稿はその成果の一部である。また、史料の整理については、平成九年―一一年度の文部省科学研究費補助金〔基盤研究（B）〕「アジアの秩序と混沌―草

の根民衆組織の結合原理に關する比較文明史的研究―」（代表…一橋大學經濟學研究科教授 谷口晉吉）の補助を得た。